

「障害者には健全者にも 誇れる人生を歩んでほしい」

隣人による殺りくという悲劇を乗り越え、国民融和と和解に向けて努力するルワンダで、障害を持つ除隊兵士が自立し、社会に溶け込んでいくためのプロジェクトがJICAの支援で実施されている。現場でプロジェクトの調整に当たる鷲谷大輔さんは、これからは障害者支援や復興支援を中心に国際協力に取り組んでいきたいと語る。



photo by Asada Yuki

挑戦者たち
Stories of
Challengers
Vol.17

国民融和と和解に 努力するルワンダ

ルワンダの首都、キガリ。空港から町へ向かう道はきれいに舗装され、中心部には数々のビルが立ち並ぶ。今からわずか十数年前、この国の人々が3カ月間に及ぶジェノサイド(大虐殺)という地獄の体験をしたことが、にわかには信じられない静けさだ。

1994年4月、ルワンダでは大統領暗殺事件をきっかけに、それまで隣り合っていたツツ族とツチ族の殺し合いが広がり、100日間で100万人が殺されたといわれている。同年7月にツチ族主体のルワンダ愛国戦線が全土を掌握した後、暫定議会による新憲法の制定、国民融和委員会の設置など、国民融和と和解のための努力が国を挙げて行われている。

この国では、90年以降の内戦とジェノサイドで、国軍をはじめ民兵組織などの兵士の数が膨れ上がり、国の負担となっていた。そのため、政府に暫定的に設置されたルワンダ動員解除・社会復帰委員会(RDC)は、主に世界銀行の支援を

受けて、97年より「ルワンダ動員解除・除隊兵士社会復帰プログラム(RDRP)」を開始し、2001年までの第1ステージで1万8692人の兵士を除隊させた。現在の第2ステージの目標は5万1000人。そのうち、これまでに3万9415人がすでに除隊している(06年9月現在)。

障害を持つ除隊兵士の自立を支援

このように、プログラムは順調に進んでいるように見えるが、そこには取り残された人々がいた。戦争で障害を負った元兵士たちだ。RDRPは彼らに対し、リハビリテーション器具の支給や医療支援はしているが、社会復帰するための技能訓練は行っていない。そのため、障害を持つ除隊兵士の多くは生活手段を持たず、自分たちに手厚いケアを施さない政府に対して不満を募らせていた。

このような状況の下、ルワンダ政府の要請を受けて05年12月より始まったのが、JICAの「障害を持つ除隊兵士の社会復帰のための技能訓練」プロジェクトだ。既存の技能訓練センターに障害を持つ除隊兵士を受け入れ、縫製や溶接、建築やコンピュータなどの技能訓練を提供



技能訓練センターでタイル張りの実習をする訓練生。ルワンダでは現在、5カ所のセンターで200人ほどの障害を持つ除隊兵士がJICAの支援で訓練を受けている

る。RDCは、主に世界銀行の支援を

受けて、97年より「ルワンダ動員解除・除隊兵士社会復帰プログラム(RDRP)」を開始し、2001年までの第1ステージで1万8692人の兵士を除隊させた。現在の第2ステージの目標は5万1000人。そのうち、これまでに3万9415人がすでに除隊している(06年9月現在)。

「RDRPですでに除隊した人のうち、10%くらいが戦争のために障害を負った元兵士です。一般的に、途上国の障害者の数は人口の10%ほどといわれているので、元兵士だから障害者が多いというわけではないのですが、彼らと一般の障害者とは、精神的なダメージがまったく違いますね。言葉を選びながら話すのは、JICAのプロジェクトに派遣されているただ一人の専門家、鷲谷大輔さんだ。「元兵士は誇りに満ちた人が多く、自分は国のために戦って傷を負ったのに、補償がないのはおかしい」と思っていて、文句も言うし、自信も持っている。だけど、コミュニケーションに帰ると差別を受けるんですよ、障害者ということ。その元兵士たちが専門技能を身に付けること



Sagiya Daisuke

JICA専門家

鷲谷 大輔



自立した卒業生を訪ね、話を聞く訓練生。カンボジアでは技能訓練のほかに、識字教育やHIV感染予防のための授業も行っている



鷺谷さんのアイデアで始めた徒弟制度(カンボジア)。センターで技能を身に付け独立した人(右)の下で訓練生を預かってもらい、現場で腕を磨く。「道を這って物ごいしていた人が訓練を受けて自立し、仕事を生きがいに見ているのを見たときが一番うれしい。」そうだ

は、誇りを取り戻し、社会の人々と融和していくために計り知れない効果があるだろう。

鷺谷さんが着任したのは06年3月。JICAの支援による訓練を希望する元兵士の募集は、国民の大多数が聞くラジオ・ルワンダの放送を通じた。指定場所が集まった応募者を、医師とともに面接し、受講するコースなどを決めていく。訓練が始まると、NGOや国が運営している5カ所の技能訓練センターを回り、障害を持つ元兵士たちの受け入れがきちんとできているか、訓練がうまくいっているかなどをチェックする。こうした仕事は、徐々にカウン

パートであるRDRRCや教育省のスタッフに移管していくつもりだ。06年9月、2カ所の訓練センターからJICAプロジェクト初の卒業生64人が巣立っていった。彼らにとってはそこからがスタート。プロジェクトでは卒業生に対して、身に付けた技能をすぐに生かして収入が得られるよう、スターターキットという工具などの機材を提供している。彼らが協同組合をつくって店を始めたという話が、いくつか鷺谷さんの耳に届いているそうだ。

NGOで見つけたライフワーク

JICAのプロジェクトが技能訓練の対象としているのは、障害を持つ除隊兵士に限られているが、鷺谷さんは、元兵士だけでなく、障害者全体への支援をライフワークとして続けていきたいと思っている。こう考えるに至ったきっかけは、ある人物との出会いだった。地雷対策、障害者支援、緊急援助を中心に

各地の途上国で活動するNGO「難民を助ける会」の事務局長を務めていた長有紀枝さんだ。サラリーマンを辞め、イギリスの大学院で開発人類学を学んで帰国した後、縁あって難民を助ける会の事務局に足を運んだ鷺谷さんは、長さんの話を聞き、彼女ののために働きたいと強く思ったのだという。「大きな目に引き付けられた感じですが(笑)。学生時代から大好きだった東南アジアの人にも似た純粋さと熱気を感じました」。一方、長さん

は、「企業で財務畑を担当してきた方がNGOを目指してくれたことが珍しく、とてもうれしかった反面、待遇面で企業に比べてはるかに劣ることが心配でした」と5年前の出会いを振り返る。難民を助ける会のカンボジア駐在員と



プノンペンに技能訓練センターに通っていた訓練生と鷺谷さん。難民を助ける会が運営していたこのセンターは、05年10月にカンボジア人に引き継がれ、今、難民を助ける会は側面からの支援に徹している

め、障害者支援組織のネットワーク化などにも取り組んだ。「こやかに淡々と、でも誠実に仕事に取り組み姿が印象的でした。特に、多くの人が苦手とするコストの削減にも着実に取り組まれ、それが事業の継続性につながったと思います」と、長さんは鷺谷さんのカンボジアでの3年間の仕事ぶりを高く評価する。

ルワンダでカンボジアの経験を生かしたい

難民を助ける会での任期を終え、そのままカンボジアで国連食糧農業機関(FAO)のコンサ

ルトアントの仕事をしていたときに見つけたのが、今のルワンダでの仕事。「JICAが専門家を公募しているのを知ったとき、カンボジアでの経験が生かせるのではないかと思ったのです」。JICAのプロジェクトは3分の1が経過したところで、鷺谷さんにはまだまだ取り組まなければならない仕事がある。訓練センターのバリアフリー化や、障害者支援のより進んだ南アフリカやウガンダから講師を呼んで指導者研修を実施すること、福祉分野の青年海外協力隊の要請……。そして、ぜひ実現したいと思っているのは、授業料の有料化だ。今、訓練を受けてい

る除隊兵士には、日当こそ支払っていないが、授業料は免除されている。タダで勉強できる環境なんてあり得ない。カンボジアのセンターでも、鷺谷さんは授業料の有料化に踏み切った。自分でお金を払ってこそ、やる気が出るのだと信じているからだ。子どものころ、テレビが何かに見た途上国の人を想い、国連児童基金(UNICEF)に小遣いを寄付したことがある。そのときから、将来は国際協力の仕事に就くのだらうと感じていた。それが実現し、障害者支援というテーマを見つけた今、さらに知識を深めていきたいと思っている。

草の根裁判「ガチャチャ」

ルワンダは、民族対立を過去のものとするためにさまざまな努力をしている。2001年には、国民全体と自然をたたえる新しいデザインの国旗を採用し、国歌も刷新された。IDカードに記していた部族名も廃止し、今では全員が「ルワンダ人」になった。

もう一つ、国民和解のために全国で行われているのが「ガチャチャ」だ。これは、ジェノサイド罪容疑者に対する裁判で、通常の司法手続きとは異なり、地域社会レベルで民衆の意見に基づいて実施される「草の根裁判制度」ともいえるもの。村の大きな木の下などで、虐殺行為の加害者、被害者、目撃者などが直接対峙し、目撃談を語る。

ガチャチャは、国際的な人権団体などから、公正な裁判を保証するための国際基準を満たしていないなどという批判も受けているが、過去を清算し、傷を癒やしていくために、ルワンダの人々が通らなければならない道なのかもしれない。

ルワンダと日本、障害者と健常者をつなぐ懸け橋になれたら……そういう姿勢で臨んでいます



06年9月、初めての卒業式で民族舞踊を披露するダンサーたち(ルワンダ)。JICAから供与された道具を使って、すでに店を始めた人もいる

Sagiya Daisuke

さぎや・だいすけ JICA専門家。1973年東京都出身。東京国際大学在学中、アメリカとオーストラリアに交換留学。卒業後、機械メーカーに就職し、欧米や東南アジアに展開する現地法人の経営分析を担当。2001年、ロンドン大学School of Oriental and African Studiesで開発人類学の修士号を取得後、NGO「難民を助ける会」のカンボジア事務所駐在、障害者のための技能訓練校と車いす工房の管理運営に従事。国連食糧農業機関(FAO)のコンサルタントを経て、06年3月より現職。